



第14回「見た目のアンチエイジング研究会」報告

日本抗加齢医学会の分科会である「見た目のアンチエイジング研究会」第14回の集会(会長=山田秀和 近畿大学アンチエイジングセンター副センター長, 近畿大学奈良病院皮膚科教授)は, 2020年9月27日, COVID-19感染拡大予防のため, オンラインにて行われた。オンラインでの質疑応答にも対応し, また, 例年は会場に来られない遠方の医療従事者もオンライン参加した。皮膚科, 形成外科, 美容外科に留まらず, 150名超が「見た目」の加齢変化にかかわる最新知見について学んだ。当日の内容について報告する。

①「老化は病である」との考え方がグローバルスタンダードに

毎回報告される山田秀和先生による「見た目のアンチエイジングアップデート」では, グローバルな最新知見が報告された。今年最大のトピックは, “加齢(老化)は疾患である”との定義が正式に認められることがほぼ確定し, 2021年には月刊オンラインジャーナル『Nature Aging』が創刊されることである。FDAが承認すれば, 今後は老化治療薬の治験も可能となり, 医学界は老化のステージングの策定を行い, 老化のコントロールを目指す。そのために必要な加齢マーカーとして, 現時点で最も精度が高いDNAのメチル化以外にも多様な指標が提案されているという現状が報告された。

また, 皮膚科領域では皮膚の加齢変化について「フレイルスキン」が提唱されるようになり, 簡易的な評価ツールなども開発されつつある。「機能性表示」についても, 今後は運動領域や環境領域(住宅など)にも拡大される方向にあると述べた。

②顔のアンチエイジングと同様に筋力維持と姿勢, 歩行にも意識を

山下理絵先生は「見た目の老化は

皮膚のシミやしわ, 白髪だけでなく, 体型や姿勢の変化, 歩き方にも現れる」との考えを示すとともに, 加齢により筋肉量の減少や基礎代謝の低下が起こるため, 対策を講じなければ姿勢や歩き方を維持できないと強調した。加齢による骨格筋量の減少により身体機能が低下する「サルコペニア」に陥ると, 転倒して顔面の打撲や骨折, 慢性硬膜下血腫を伴う危険性に言及した。

また, 加齢によって眼瞼下垂が起こると姿勢も悪くなり, 老化促進のスパイラルに陥るとも指摘した。全身の見た目のアンチエイジングを考えるには, 顔のアンチエイジングと同様に全身の機能において予防が必要であること, そのためには筋肉量を減らさないよう, とくに大腿四頭筋を強化し, ビタミンD不足を防ぐ食事を心がけることが大切だとした。

③手術以外の治療法が導入された1970年代以降の美容外科史

白壁征夫先生による美容外科史は, 同研究会の第13回で前半が解説され, 今回はその後半となる。1970年代になると, 美容外科医のなかでも, とくに個人開業医においては診療を行うだけでなく, 女性誌やラ

ジオ, テレビなどに出演するようになった。第3次美容外科ブームの時代が到来し, フランチャイズやチェーン展開するクリニックが急増してビジネスとしての美容医療がスタートし, また1970年代後半にはJSAPSとJSASという2つの美容外科に特化した学会が設立された(両学会の日本語表記はいずれも日本美容外科学会である)。さらに, 注入や美容機器による非観血的な美容医療の拡大に伴って発展・拡大する。1990年代からはレーザー脱毛が流行し, エステティックサロンでの脱毛施術が問題となった。そのような時代を経て, 手術だけではなく美容医療として発展していると解説した。

④植物療法「フィトセラピー」における女性のデリケートゾーンケア

植物療法士として活動する森田敦子氏は, 薬理効果をもつ植物を利用して自然治癒力に働きかけ, 病気の予防・ケアをする欧州の伝統療法「フィトセラピー」を紹介。これまでほとんど注目されなかった女性のデリケートゾーンケアの重要性と, フィトセラピーを活用したケア方法について述べた。女性器から良質粘液が分泌されることによって, ホル